

JELA NEWS

JELAニュース 第4号 2004年8月1日発行 発行責任者 ローウェル・グリテベック

日本福音ルーテル社団

〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町1-1 Tel.03-3260-8637 Fax.03-3267-4636

jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

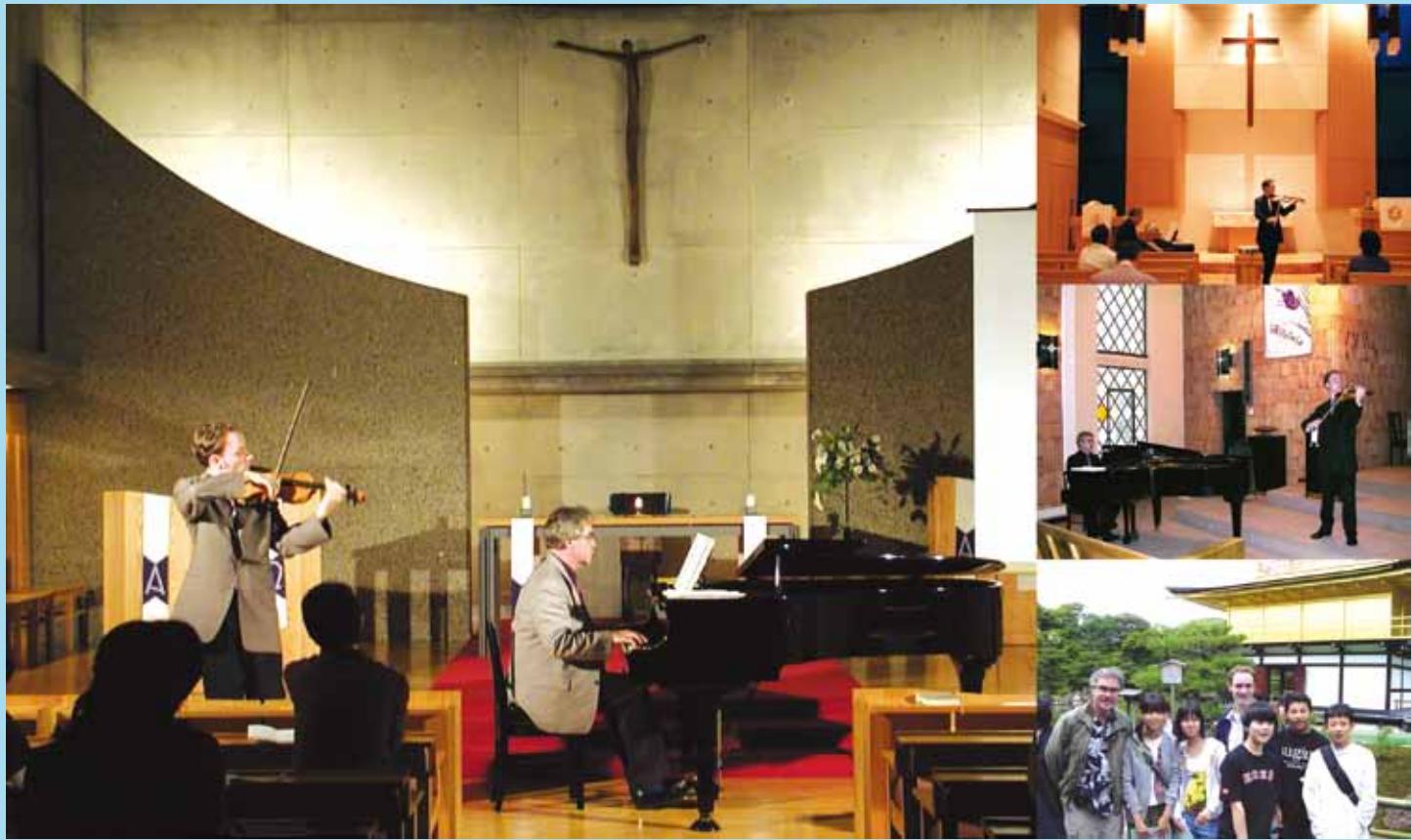
難民支援 · アジア子ども支援 · ブラジル子ども支援 · ボランティア派遣 · 奨学金制度 · 宣教師支援

社会に出ていき 手をさしのべる

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」
マタイによる福音書 第25章35~36節

カナダからさわやかな風

第1回「世界の子ども支援チャリティコンサート」開催される



JELAと日本福音ルーテル教会の世界宣教委員会が共同で主催する初の「世界の子ども支援チャリティコンサート」が5月13日の日本福音ルーテル東京教会での演奏会をかわきりに、NRK東京ルーテルセンター教会、九州ルーテル学院、神戸ユニオン教会、大阪教会、広島教会、賀茂川教会と巡演し、5月21日に名古屋めぐみ教会で幕をとじました。最終日には125名の来場者が与えられ、最高の盛り上がりを見せました。8つの会場に足を運んでくださった方は約530名、席上献金の総額は85万円に達しました。全額を世界の子どもたちのために捧げます。皆様ほんとうにありがとうございました。

このチャリティコンサートは、初めての試みであるにもかかわらず協賛団体が十以上与えられる等、たいへん恵まれたスタートを切ることができました。毎年よりよい

コンサートに育ててまいりますので、ご支援・ご協力のほどをよろしくお願ひいたします。会場にいらっしゃった皆様は、何かお気づきの点がございましたか。たとえば、演奏曲目はいかがでしたでしょうか。九州会場からは、モーツアルトのヴァイオリン・ソナタの一部を組み込んだり、アンコールとしてピアノソロの『サウンド・オブ・ミュージック』メドレーを披露したりしました。お楽しみいただけましたか。聖歌402番『丘に立てる荒けずりの』やラストの『聖なる都』はたいへん好評でしたが、テッパー親子の演奏をバックにみんなで歌いたかったという声もありました。このような皆様のご意見を来年の企画に反映したく存じますので、ご要望・ご感想をJELA事務局までお寄せください。演奏者についても、ふさわしい方をご存知でしたら、ご連絡いただければ幸いです。

この号にはこんな記事が

チャリティコンサートのエピソードあれこれ	2
飛び入りの聴衆	
来場者数とCD抽選会	
テッパー氏の誕生日一人の女性	
帰国したテッパー親子の近況	
難民支援	3
難民申請者支援におけるNGOと政府の協力	
ボランティア派遣	4
助けを必要としている人々のもとへ(インド)	
その他のボランティア派遣者	
ブラジル子ども支援	4~5
ヘンシリヤン最新情報	
カーザ・マテウス最新情報	
宣教師の働き (ジョン・ボーマン師を偲んで)	6~7
一粒の麦	
愛をはこぶ大きな手	
最後まで子どものことを考えていた父	
高田中学校文化発表会資料「あとがき」	
奨学金制度	8
ソーシャルワーカー、そして農場経営者として	
献金者一覧	
編集後記	

Siegfried & Christer Tepper Charity Concert

テッパー親子のチャリティコンサート



飛び入りの聴衆

初日の東京教会でのことです。演奏中なのに会場に入らず、ロビーで一人うつむき加減に座っている女性がいました。気分でも悪いのかと心配になりましたが、じつはこの方は、買い物帰りに聞こえてきたきれいなメロディーにさそわれて2階の会場に来られたということです。あいている席にご案内しようとしたのですが、買い物袋が気になるのか遠慮され、廊下で一心に耳を傾けていらっしゃいました。コンサート終了後にこの話を演奏者のシーゲフリードさんにしたところ、多くの入場者の他にこのような「飛び入り」の聴衆がおられたことを心から喜ばれました。

来場者数とCD抽選会

8会場で530名という入場者数は、平均すると1会場66名です。最大が名古屋めぐみ教会の125名、最小が神戸ユニオン教会の一ヶタ（！）となりま



す。演奏者のCDを各会場3枚ずつ来場者にプレゼントするアトラクションを行い喜ばれましたが、神戸で抽選の時間が来たと

きには、一瞬「1枚でいいかな？」と迷いました
しかし、そうすることにためらいを感じ、最終的には3名の方に差し上げました。数えるほどしか
聞き手がいないコンサートにわざわざ足を運び、
最後まで聴いてくださっている聴衆の方々こそ、
演奏者やコンサート運営者である我々を励ます大
切な存在ではないのか、この中のお一人にでも本
日の演奏と証しが貴重な体験として意味を持つな
ら、コンサートは成功ではないか、と考え直した
からです。神戸でCDを手にされた方、楽しんで
いらっしゃいますか。

シーグフリードさんの証しと一人の女性

コンサートの最終会場となった名古屋めぐみ教会の会堂は、今回最多数の来場者で一杯になりました。会場の雰囲気もコンサートの内容も、これまでの7回を集約するかのような活気に満ち、ティッパー親子のすばらしい演奏と、シーグフリードさんの喜びあふれる証しによる感動の時間を共有しました。

コンサートの余韻が残る中、お二人がCDにサイ
ンしながらご来場の方々と歓談しているところに
一人の女性が近づき、シーグフリードさんの証し
に娘ともども感動し、涙し、励まされたと伝えま
した。傍にはその方のお嬢さんが立っていました。
詳しくお聞きすると、お嬢さんは指を怪我し、そ
のためにピアノを断念しているとのことでした。

11年前、シーグフリードさんは左手中指と薬指をほとんど切断するほどの大怪我をしました。治療に当った医者はだれも、彼のピアニストとしての再起は非常に難しいと絶望的な診断を下しました。苦悩の中、シーグフリードさんに祈りと治療の長い日々が始まりました。家族も友人も彼のためにたくさん祈りました。

ある日シーグフリードさんは突然、指の腫れが引き、感覚が戻っていることに気が付きました。信じられない思いでピアノを弾いてみました。真実かどうか神様に聞いてするために3時間以上もできるだけ強く鍵盤を叩きつけました。問題は何も起りませんでした。彼の指は奇跡的に治癒したのです。医者さまもこの事実を全

く信じることができませんでした。この経験により彼の信仰はますます強められ、希望を失わないこと、祈りには力があること、神様は偉大であることをコンサートを通して人々と分かち合うことを使命とするようになったのです。

シーグフリードさんは若い女性の手を取り、神様の癒しがあるように、神様の導きを信じ、希望を失わないように祈りました。その場に居合わせた私たちも涙のうちに心を合わせて共にお祈りしました。



写真：女性の指の癒しのために祈るシーグフリード・テッパー氏
(名古屋めぐみ教会にて)

帰国したテッパー親子の近況

日本を後にしカナダに帰られたテッパー親子から、元気にしているとの連絡がありました。父親のシーグフリードさんは相変わらず饒舌な日々を送つていらっしゃることでしょう。物静かなクリスターさんはイタリアでヴァイオリンの勉強にいそしんでいるとのことです。7月中旬から8月にかけてはカリフォルニアで親子によるコンサートが控えおり、また7月12日には、お二人で新しいCDをレコーディングするそうです。日本の会場で販売されたCD同様、人々に安らぎを与える素晴らしい作品が完成することでしょう。

日本福音ルーテル社団 (ELCA) ブラジル。今後も毎年行われる「ペケダム事業」と日本福音ルーテル教会世界宣教委員会(邊境紹介委員長)は、5月中旬から下旬にかけ、日本でのシンクスピーラー、チップバーグリスター、ティッパー親子によるチャリティ巡回。サイトを開設。(このうち5月14日㈬は、難民母体の一つである日本ルーテル教会の園田ルーテルセントラル教会、東京都練馬区)で開催。約100人が集まる。テーマは「アーリングー」と「マルテン・イン・二ードー」。肌病に苦しむ世界の子どもたちに愛を運びます。両親とも、妻によるヤリティコーンたトドキを経て日本へ

演奏するテッパー親子=5月14日、東京ルーテルセンター教会

コンサートの模様を伝える新聞記事（キリスト新聞5月29日付）

難民支援

日本で難民申請している人々の支援は、外務省人道支援室等の政府機関と、日本福音ルーテル社団等の多数の非政府組織（NGO）が互いに協

力しながら実施しています。今回は両者の橋渡し役を担う国際機関、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）職員の小田野晃己さんに、最近の日

本における難民支援の展開と両者の役割について説明していただきます。

難民申請者支援におけるNGOと政府の協力：再認識されるNGOの役割



UNHCR駐日地域事務所
法務部・社会事業担当補佐 小田野晃己

2002年5月の中国の瀋陽での事件以降、日本の難民をとりまく制度は大きな変革の時を迎えていました。今年の通常国会で成立した「出入国管理および難民認定法」の改正法案は、1982年の難民認定制度整備以来、初の抜本的な改正であり、これにより日本の難民保護制度が現在の時代により即した制度となることが期待されています。ここ数年、難民認定制度だけでなく、難民申請手続き中の難民申請者に対する生活支援についても様々な改善が見られます。

また、申請者の生活をより近い目線から支えるNGO（非政府組織）の役割の重要性が再認識されてきました。政府機関とNGOが協力することにより、今まで以上に受益者である申請者のニーズに即した支援の可能性が高まっているのです。

難民申請者への支援の枠組み

申請者の諸権利は、一義的には国際人権法によって示されています。さらに、難民は認定されて初めて難民となるのではなく、申請の時点で難民であった者が、認定によってその事實を確認されるという性格上、1951年の難民条約の締約国には、認定された難民のみならず難民申請者に対しても、最低限の支援¹を行うことが求められているという意見もあります。多くの欧米先進国においては、住居、医療、生活費支給の制度が整っています。また、日本においても、困窮度が高いと判断された申請者を対象とした政府による特別な援助²があります。

日本の難民認定手続きでは一次審査申請から

異議申出申請の結果が政府から出るまで、通常半年から1年を要します。この期間に申請者が必要とする支援には、互いに補完しあう二種類のものがあります。衣食住などの物的な支援と、そうした物的支援のコーディネーションや医療面・精神面をサポートするカウンセリングなどです。生活に困窮している申請者への物的支援は、日本政府が外務省所管の「財團法人アジア福祉教育財團」に委託し、同財團の下に設置された難民事業本部（RHQ）が実施しています。一方、支援のコーディネーションをはじめ、難民申請手続きに関する情報提供、また、心理カウンセリングなどはNGOが得意とする分野です。これらの支援はどちらか一方だけでは申請者の生活全般を支えるのには不十分です。

NGOは通常その財源を個人や特定の財團からの寄付に頼っているため、多くのNGOでは運営費も充分に得られない状況です。そのため、NGOから支援対象者への継続的な援助金の捻出は極めて困難です。そこで、RHQが運営する政府予算による「保護措置（保護費）」が重要な役割を果たします。さらに2003年からは住居のない申請者に緊急にシェルター（仮の住まい）を提供する枠組みが整備され、2004年5月現在、16人分のベッドが用意されています。

一方、NGOはその特性を生かし、援助対象者一人ひとりのニーズを詳細に把握し、日々の生活上の悩みの相談などを通じ信頼関係を築くなど、ソフト面を中心とした活動がみられます。夜でも週末でも困った時にいつでも相談に応じ、その場で的確なアドバイスを提供するという徹底的な現場主義の立場をとっています。申請者（=クライアント）が病気になれば、病院の診察にも付き添い、生活上の細かいアドバイスなども行っています。

ルーテル社団は、政府による申請者への援助が始まる以前より、彼らのニーズを把握し、支援金を支給し始め、また、難民申請者用シェルターJELAハウスを始めた先駆者であります。RHQのシェルターも、ルーテル社団がJELAハウスを運営する上で長年培ってきたノウハウの一部を参考にして作られたように聞いています。このJELAハ

ウスは、現在も重要な役割を果たしています。

申請者のおかれた現実と関係団体の連携

先日も私はRHQより保護費の支給を受けていた申請者から連絡を受けました。この申請者は以前から申請者特有の強いストレスにより精神科で治療を受けていました。今回さらに内科系疾患と思われる症状が続いているけれど、お金がないために病院が必要な検査をしてくれないという相談でした。急いでNGOに連絡すると、その団体のソーシャルワーカーが本人を病院に連れて行き、医師と掛け合った結果、本人は緊急入院することになりました。医療費は、RHQから支援を受けられたため、入院治療が可能でした。その後も、このNGOのソーシャルワーカーは、RHQと医師と調整をしつつ、「入国管理局に指定された手続き日に出頭できない」「暮らしていたアパートに戻れないのではないか」「RHQからの生活費の受け取りに出向けない」などの、申請者が抱える問題に対処しています。このように政府による保護費支給とNGOによる支援は難民や申請者を支援する上で補完関係にあります。政府の保護費の支援は援助の根幹を成すものであり、NGOはその政府の支援の意義を最大限引き出し、生活面でのカウンセリングをはじめとして、住居の提供や日本語習得の手伝い、収容者への定期的カウンセリング、法的手続きをついての助言や、弁護士の紹介まで幅広い活動を通して、NGOの特性を生かした援助を提供しています。これゆえに、この両者の活動の調整がなされて初めて、バランスのとれた、効果的な支援が可能となります。

UNHCR東京事務所は、政府とNGOの相補性を認識しつつ、さらなる協調関係を拡げるべく協力したいと考えています。

注1. 庇護希望者に付与されることが望まれる受け入れ環境の基準として、到着直後の対応、難民申請手続きに関する正確な情報、法的助言、移動の自由、初等教育、医療へのアクセス、住居、金銭的援助、メンタルヘルスケア、そして場合によっては就業の機会の提供などがある。

注2. 多くの申請者は安定した在留資格や就労許可を持っていないため、健康保険や地方自治体による生活保護、また、公的な就労斡旋の対象とはならない。

ボランティア派遣

久しぶりにインドにボランティアを送ることになりました。今回の派遣者は、4年以上の看護士経験を有する野澤美幸さんです。6月中旬から2ヶ月あまり、ジャムケッドを中心に奉仕活動に携われます。以下は、出発直前にいただいた野澤さんからのメッセージです。現地での健康が守られ、有意義な働きができるようにお祈りください。

助けを必要としている人々のもとへ 野澤美幸



皆さん、初めましてこんにちは。私はこの度JELAのご支援を受けインドへボランティアとして派遣させて頂くことになりました野澤美幸と申します。インドへ出発する前に簡単ではありますがあなたへのご挨拶を兼ねて自己紹介をさせて頂きます。

私が海外ボランティアを最初に意識したのは結構前のことで、今から17年前の小学5年生の頃でした。ある日本人助産士がアフリカで貧しい人々の為に一生懸命かつ活き活きと活動しているドキュメンタリーフィルムを見て、「私も国境を越えて困っている人達の役に立ちたい」と強く思いました。それが今の私の原点だと思います。その数年後、マザー・テレサの活動とその精神に深く感銘を受け、「いつかマザー・テレサの施設でボランティア活動をしよう」と心の片隅で決心しました。高校卒業後は地元の新潟県立看護短期大学に進み、その後は東京の病院で循環器外科病棟の看護士として4年半勤めました。看護士として働いている間、ボランティア活動を長期でしたいという思いが日々強くなり、海外で活動するのに必要な英語を身につけるためと自己を成長させるために一昨年の秋に退職して渡英しました。今年の2月にインド・ボランティア関連のことをインターネットで検索している際にJELAの活動内容を知り、「これだ！」

と思い、すぐに申し込み3月下旬に帰国し現在に至っています。面接時からお世話になっていますグリテベック氏と森川氏にはいつも細かなところまでサポートして頂き、このJELAのインド・ボランティアプログラムに申し込んで本当に良かったと思っています。



看護士時代の野澤さん（中央）

発展途上国でのボランティア活動は「やりたい」という思いだけでできるほど簡単なものではないと思っています。貧困のなかにある人を助けていたいのなら今回の派遣にかかる費用をそのまま献金した方が飢えで苦しむ人の為になるのではないか、と自問することもあります。でもどんなに悩んでも行き着く答えは、「誰かの助けを必要としている人々に現地でこの手を差し伸べたい」という気持ちだけなのです。そしてこの思いは諦めようとする気持ちを一切寄せつけません。このように我的強い私ではありますが、インドではできる限り精一杯努力することを皆さんに誓います。

最後に、JELAと巡り会いインド・ボランティアの機会を私に与えて下さった全ての方々に心から深く御礼申し上げます。そしてこれからも何卒宜しくお願い致します。それでは、行って参ります。（2004.6.13記）

その他のボランティア派遣者

米国のグループ・ワークキャンプに10名の青少年と3名の引率を派遣します。日本からの参加が4年目を向かえる今年は、7月27日から8月10日までコロラド州に滞在します。九州で活躍中の、同州出身の短期宣教師エリザベス・ロード姉の母教会がホームステイのお世話をしてくださいます。次号（11月発行予定）に参加者レポートを掲載しますのでお楽しみに！

他には、一人の青年をブラジルに派遣する準備を進めています。現在ビザ取得の最終段階にあり、派遣が明確になりましたら、次号以降で改めてご紹介します。



ブラジル子ども支援

<ヘコンシリヤン最新情報>

サンパウロから日本の友人の皆様へ

財務責任者 Karin Simon



2月、プログラム・コムニタリオ・ダ・ヘコンシリヤンは2004年の活動を開始しました。教育担当者とコーディネーターは、休暇から心身ともに休息してヘコンシリヤンに戻ってきました。

以前にお知らせしたように、私たちは昨年11月にヘコンシリヤンに隣接する土地と建物を購入しました。思いがけず、ドイツから購入資金の73.5%に相当する献金をいただいたからです。家は良い状態ですが、やはり改修が必要です。建物の安全性を高め、小さな寝室を大きな教室に改造しなければなりません。また受け入れる子どもの人数を増やすために市との新しい協力関係を築くことも必要です。もし今まで以上の財的・人的支援が得られるならば、ヘコンシリヤンではさらに60名多くの青少年を保護することが可能になります。

アメリカ合衆国のロータリークラブより寄贈された歯の治療車は、3月15日、1名の歯科医師と1名のアシスタントにより治療を開始しました。アシスタントはヘコンシリヤンが雇用した地域の若い女性です。

保育施設に隣接するコミュニティ・ハウスも改修工事を終え、新しい活動を開始しました。地域の多くの成人が、コンピューター、手工芸、料理、裁縫、読み書きのクラスに参加しています。さらに毎週何百人という人々が見学に訪れ、参加申し込みをしています。

しかし、まだ私たちに欠けており、子どもたちが最も必要としているのが雨天でも使用できる運動場です。私たちはこの夢が実現することを願い、祈っています。

貧しい地域の子どもやその家族を支援するヘコンシリヤンの一つ一つの新しい働きは、とても

大きな意味を持ちます。神様は世界中の多くの「助け合う手」を通して、必要な備えをしてくださると信じています。（2004年3月24日）

主にある兄弟姉妹の皆様

Joilson Martins da Silva

皆様に親しくご挨拶できる機会が与えられ、とても嬉しく思います。私はヘコンシリアンの教育担当者のジョイルソンです。私たち教育担当者は、子どもたちの抱える深刻な問題や緊急保護の必要性と毎日向い合い、可能な限り良い状況を作り出そうと努力しています。ヘコンシリアンに集まる子どもたちの現実は苦痛に満ちており、彼らの生活には愛情面、家庭面、精神面、社会面で深刻な問題が存在します。

私は現在、6歳児から8歳児の2つのグループに、童話、民話、史話などを教材として読み書きを指導しています。それはたくさんの愛情を必要とする仕事です。子どもたちが抱える問題は大きく深刻ですが、しかし問題の困難性は、私たちが問題に立ち向かい、解決のためにより良い方法を考察し、それを実行していく上の推進力となります。

今年私が担当するクラスの中に、悲惨な状況から極めて攻撃的で反抗的になっている数人の子どもがいます。私が目標としていることは、豊かな愛情に満ちた対話の中で、隣人への愛と尊敬を育てていくことです。情操教育は子どもたちの創造性を発展させ、同時に狂暴性を減少させます。

特別なケアを必要としている子どももいます。私は、その子どもたちがこの社会で生きることに意義や目的を見つけるように努めながら、彼らがお互いを助け合うクラスとしてまとまるよう求めています。子どもたちは、彼らの問題を共感し、共有してくれる人を必要としています。しかし、子どもたち自身の互いに助け合う精神が教育担当者を助け、しっかりしたクラスに作り上げることができます。そこで第一の目的は存在の意義を学ぶことです。私は教育担当者として子どもたちと係わることを幸せに思っていますが、私の役割は教育者というよりも、子どもたちの父親、兄弟、友人になることだと理解しています。私の考えでは、眞の教育者とは、子どもを一人の人間として尊敬し、彼らに欠乏しているものを引き受け、それを完全にすることのできる人だと思います。

皆様に改めて心からお礼を申し上げます。皆様は私たちの社会活動が継続し、さらにより良い働きを提供できるよう助けてくださる信頼できる友人です。神様が皆様お一人お一人を豊かに祝福し、聖なる光をもって皆様を輝かしてくださいますように。（2004年4月30日）

＜カーザ・マテウス最新情報＞

2004年4月19日、皆様からお祈りとともに捧げられる献金の中から8,200ドルをイースター献金としてブラジルの4つの支援先にお送りしました。各施設からお礼状と領収書が届いていますが、その中からカーザ・マテウスの管理責任者のシリビア姉からのメールを紹介します。

JELAの皆様

一日の仕事を終え、事務所を出る前にもう一度メールを確認しようとコンピューターの前に座りました。私を待っていたのは、イースター献金をお送りいただいたとの皆様からの嬉しいお知らせでした。日本の皆様の暖かいご支援を心から感謝いたします。

2004年前期の青年就労援助プログラムは、カバシタサン・ソリダーリアという団体と連邦政府からの援助の下に2つのコースがあり、合計75名の青年が勉強しています。それぞれ7月に学びを終えますが、最後に商業やサービス業などの企業で、45時間から200時間の研修を行うことになっています。少なくとも3割の学生が職を得られるならば良いと願っています。就職において一番大きな問題が青年の学力です。中学を終了していない場合、職を得る可能性は非常に低くなります。

青年就労援助プログラムは大方成功していますが、管理運営面では十分とは言えません。2つの支援団体からの財源は、学習、給食、文化活動、教材、学生への奨学金など、青年プログラムの直接的な費用に当てられます。奨学金制度は新しく始めましたが、奨学金提供者を発掘するのは困難なことです。カバシタサン・ソリダーリアのクラスに属する学生には一人当たり50ヘイス（約15ドル）、連邦政府のクラスの学生には150ヘイス（約45ドル）の奨学金が与えられます。この奨学金制度によって青年プログラムは高予算が必要になりました。現在の支援金では、間接的な費用、例えばコーディネーター、教育補佐、機械設備維持、受け付けなど、管理運営に係る諸費用までカバーするには不可能です。しかしこれらの仕事は、プログラムの管理統轄、効果性、効率性を保証する上で欠くことはできません。

皆様が今回お送りくださった4,000ドルで、本年8月からの後期の青年就労援助プログラムを開校します。しかし、前述のように今期のプログラムに財源不足が生じていますので、それを補足するために皆様からの4,000ドルの一部を充当しても良いでしょうか。

本年度の受講者は昨年度と趣きが違い、危険性により近いところで生活している青年たちと言えます。大多数が、過去において、また現在でもドラッグの問題で警察沙汰を起こしています。また何人かはすでに子持ちで、複雑な人間関係や、問題の多い家庭環境で生活しています。このことについてはまた後日詳しくお知らせします。

このように多くの問題がありますが、一つ一つを解決していくために私たちは祈りをもって忍耐強く活動を進めています。皆様もブラジルの青少年とカーザ・マテウスの働きを覚えてお祈りくださいようお願いいたします。

シリビア・シューネマン



子どもたちと一緒に本を読むジョイルソンさん(中央の男性)

ジョン・ボーマン師を偲んで

2004年3月22日(月)午前6時43分、ジョン・ボーマン牧師が79年にわたる生涯を終え、天に召されました。ボーマン先生は、障害のある多くの人たちから「お父さん」としたわれた方です。私財を注ぎ、借金をしてまで設立した岐阜県大垣市内の施設を通じて支援した障害者は400人になります。その死を悼む記事は地元の岐阜新聞や中日新聞のみならず朝日、毎日等の全国紙でも大きく報じられ、毎日新聞掲載の略歴には、「1953年に宣教師として来日し、66年大垣市内の教会に赴任。ユニセフ（国連児童基金）の募金活動をしながら71年に、私財をなげうち垂井町に心身障害児施設『あゆみの家』を設立。後に『ルター・ホーム』や、『いぶき作業所』の設立にも尽くした。一昨年までの三十数年間、師走のJR大垣駅前で、深々と頭を下げて淨財を呼び掛ける姿は市民の心に感銘を与えてきた。84年に岐阜県ユネスコ協会『グランプリ特別賞』、97年に岐阜県功労者、日本顕彰会の功労表彰、98年大垣市功労章を受けている」と紹介されました。

キリストの愛を体現したボーマン先生のお働きとお人柄を偲び、ここに先生ご自身と関係者の方々の記事を掲載いたします。

愛をはこぶ大きな手

デビッド・パーソン（市ヶ谷教会）

ボーマン先生が岐阜県の西濃地方に今から40年ほど前に赴任された当時、障害者のいる家族の中には、障害者が家にいる事実を恥じたり恐れたりする家族もありました。そして、もしそれが世間に知られるようになれば、兄弟姉妹が結婚できなくなったり、いろいろな差別を受けると考える人もいました。ですから、お客様が来た時には、障害のある子どもさんを特別の部屋に隠し、来客が帰るまで静かにしているように告げました。彼らにとっての恥ずべき事実を誰にも知られたくなかったのです。ボーマン先生はこのようなことがその地方で行われていることをご存知でした。「あゆみの家」を始めるとき、障害のある子がいる家庭を訪問し、「あゆみの家」の利用を呼びかけました。レイ子さんもこのような形で「あゆみの家」に来た一人です。

3月24日の前夜式の席で4人がボーマン先生



一粒の麦

ジョン・ボーマン

『一粒の麦は、地に落ちて死ななければそれは、ただ粒のままである。だが死ねば多く実を結ぶ』
ヨハネ12章24節

畑に種を蒔くときのことを考えてみましょう。種は殻に包まれています。その種は畑に蒔かれないと死んでしまいます。しかし、畑に蒔かれ土の中で殻が破裂して、つまり一度死んで初めて新しい芽が出てくるのです。このことは私達の生き方を示しています。

私達は一人一人が神様から与えられている能力（ある人は計算が得意、ある人はお料理が得意でしょう）をただ一人のためだけに使って、しまい込んでしまったなら、それは何時までたってもたった一粒の麦の種にすぎません。

他の人のために喜んで自分の持っているものを差し出して使って下さいという時初めてその能力は大きく生かされるのです。それが『地に落ちて死ぬ』という事の意味です。小さくても私達が持っている種を差し出して地に蒔くなら神様はそれを喜んで大きく育てて下さり、大きな実りをもたらさせて下さい。

（ボーマン先生が代表を勤められた障害者共同作業施設「ハウス希望」の紹介パンフレットより）

の思い出を語りました。レイ子さんが話す番になった時、最初は泣いているばかりでした。しばらく泣いた後、息がとぎれとぎれになりました。会衆がもらい泣きするような美しい涙でした。自分の人生を大きく変える人物に彼女が出会ったことは明らかでした。しかし、ボーマン先生の思い出として彼女が口にしたのは、彼女を抱くボーマン先生の大きな手のことでした。その手をとおして彼女は大いなる愛を感じとったのです。こんな小さなことが、なんと美しく、人生を変えることでしょう。ボーマン先生の手をとおしてレイ子さんは、そこにイエス様の愛がいきづいているのがわかりました。彼女に救いの時が来たのです。私たちの心は感謝で満ちあふれました。



子どもを抱くボーマン先生
(写真の子は記事の登場人物とは別人です)

最後まで子どものことを考えていた父 ナタン・ボーマン(神水教会)



肺、心臓、脳の梗塞に苦しむ意識不明に陥った二日後、私の父ジョン・ボーマンはこの世を去り、天の父の家に帰りました。骨盤骨折で入院してから2週間目、当初の退院予定日でした。父は4年前からアルツハイマーを患っていました。その容態は急激に悪化の一途をたどっていました。私は入院直後の父を見舞いました。ある日の夜中の3時ごろです。父は病院じゅうに響き渡る声で話し出しました。そして突然、「子どもたちの面倒は誰がみるんだ!」と叫びました。私は父に、ちゃんと世話をする人がいるから心配しなくていいこと、父は文字どおり無数の子どもたちを自分の子どものように世話してきたこと、父の働きに影響を受けた多くの人々が助けの必要な子どものために立ち上がったこと、を言って聞かせました。しかし父には、自分なしでも子どもたちが大丈夫だということが理解できないようでした。

火葬場に向かう途中、道路わきで一人で泣いている子どもを母が見つけました。運転していた私の妻に車を泊めるように言ったあと、母は私にその子のそばに行くように命じました。その7歳の子は顔の右側に怪我をしており車で家に送ろうとしたのですが、知らない人の車に乗ってはいけないと言っていたのでしょうか、いくら説得してもだめで、とうとうその子が自分の家まで歩くのにつきそい、母親の帰宅を確認してからその場をあとにしました。その間、30分が経過していました。「お父さんが生きていたら同じことをしたでしょう」と私の母は言いま

した。そして、この行いが最善の形で父を散したことになる(つまり、お別れの式全体を時間どおりに終わらせるよりも、困っている子どもを助けることのほうが大切なのだ)と思いました。

告別式では、次の聖句が読まれました。「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の中にとどまるでしょう。子たちよ、言葉や口先だけでなく、行いを持って誠実に愛し合おう。」(ヨハネの手紙一3章16節~18節)。なんと父の告別式にふさわしい言葉でしょう。メッセージはスティンバーグ先生が取りつぎました。父は生前それを望んでいました。これも神様の恵みです。先生は引退して米国に戻られていたのですが、ちょうど父の葬儀のときに日本を訪問していました。日本福音ルーテル大垣教会の斎藤先生が司式をなさり、棺には麦が描かれました。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ……。

高田中学校2年6組5班が編集した高田中学校文化発表会資料

『ジョン・ボーマン —日本の子供たちのために』

(1995年11月12日発行) の「あとがき」より

私達高田中学校2年生は、障害問題を取り上げ人権について勉強しています。6組は身近にある施設を通して、この問題を考えいくことになりました。高田中学校の近くに「あゆみの家」があります。今年の夏休みに学級全員が「あゆ

みの家」に行き、ボランティアをしたりして障害のある方と交流する機会をもちました。そんな中でボーマンさんとめぐりあっていろいろお話を聞かせてもらいました。「あゆみの家」を作られたボーマンさんの生き方についてもっと知りたいと思うようになりました。いろいろ調べさせていただきました。

調べていくうちに、「あゆみの家」ができるまでのことやボーマンさんがなさってきたご努力、そして、どれだけボーマンさんが偉大で、私達がちっぽけな存在なのかが分かってきました。自分の給料をさいてまで子供たちに贈り物をしたり、「あゆみの家」を建設するために街頭募金をしたり……。これら全て自分のためにしたのではなく、日本の子供たちのためだったのです。ボーマンさんの人を思う温かな心がにじみでています。自分のエゴを捨てて、他人に尽くすということは簡単にできるものではありません。私達はボーマンさんの生き方を知り社会福祉について考えさせられました。

私達もボーマンさんの生き方に少しでも近づけるように、全ての人が幸せに暮らせる世の中を、私達自身の手でつくっていきたいです。そのためにはまず、私達自身にある差別の心をなくしていくことが大切だと思います。学校の中で仲間を大切にする心をもち生活していくことをめざします。



* 「あゆみの家」では、ボーマン先生の奥様であるベルニダさんをはじめ多くの方が、先生の意志をついで毎日献身的に働いていらっしゃいます。皆様のお仕事の上に、神様の豊かな祝福がありますようにお祈りいたします。なお、連絡先等は以下のとおりです。

社会福祉法人 あゆみの家

〒503-2123 岐阜県不破郡垂井町栗原2066番地の2
電話 0584-22-4333
ファックス 0584-22-4344
ホームページ <http://www.mirai.ne.jp/~ayumi>
電子メール ayumi@he.mirai.ne.jp

「あゆみの家」ホームページ

「神様の子どもたち」が支えるインド・ジャムケッドの CRHP (Comprehensive Rural Health Project : 総合的地域健康プロジェクト) で奉仕している Jayesh Kamble 氏が JELA の奨学金を得て、この4月から栃木県のアジア学院で農業の研修を受けています。来年3月までの学びが祝されますようお祈りください。以下、本人からのメッセージです。

ソーシャルワーカー、そして農場経営者として

Jayesh Kamble

私はインド西部のVadalaという村で1971年に生まれました。ジャムケッドのCRHPは世界的に有名なプロジェクトですが、私の両親は1972年の創設時からこの働きに関わっています。私は子ども時代をCRHPの中ですごし、保健に関する基礎的知識の重要性に目が開かれました。そして保健を専門とするソーシャルワーカーになり、1996年にCRHPのスタッフに加わりました。以来CRHPは、女性の地位向上、収入源の開拓、農業開発、健康の維持増進に向けた環境整備とその地域全体での取り組み等、多くの事業を総合的に展開しています。私の仕事はこれらすべてに関わるものです。

私と妻は二人ともソーシャルワーカーであり、思春期の少女の成長、村の健康管理に従事する人たちへの保健や発達に関する訓練、農業の組織化によりよい農業実践等にこの5年間取り組

んできました。保健関係の仕事に加えて私は、二人の世界的な農業コンサルタントとともに、農場経営にも働きの場を広げました。ジャムケッドは旱魃地域で土地が瘦せており、年間雨量は300ミリから400ミリ程度です。水を確保するために私たちは分水、灌漑について様々な技術を駆使しました。おかげで、25エーカー（注：1エーカーは4047m²です）の土地にはザクロや、タマリンド、西洋スグリのような乾燥地に強い果物の木が繁っています。また、この地域に多いカスター・アップルの木が20エーカーの土地に生えています。人々は山羊を食用に飼い、牧草地を開拓します。私たちは灌漑地への植栽のしかた、レーズンなどの乾燥果物、また乾燥野菜などの作り方についても教えています。

JELAのご協力を得てアジア学院で研修できることとなり、たいへん感謝しています。おかげで化学肥料の危険性が理解できました。私が働くインドの農場では、ほとんどの所で化学肥料と殺虫剤を使用しています。アジア学院での有機農法の学びをインドに持ち帰り、自分が奉仕する地域に有機農法を普及させたいと思います。このようにアジア学院での学びは、CRHPで総合的な健康増進を目指す私の働きにおおいに役立つものです。

私は教会でも積極的に奉仕しています。地域の農民はだれ一人としてクリスチヤンではありませんが、私はそのような人々に、キリストを知る者が備えている良きものを分かち合いたいと思っています。

感謝をこめて

相場信夫／赤間峰子／尼嶋治／飯島早苗／池田富雄／石井康夫／石川文一郎／石田浩子／岩間雪子／宇五十鈴／梅津トキ子／裕淑代／大垣教会／大柴節子／太田まち子／小川晶人／兼岩恵美子／上窪松子／木曾勝子／清田純次／京谷信代／鉢路教会／窪田都子／高藏寺教会／古財悦子／古財克成／小坂敦子／斎藤正恵／佐々木志美／佐々木ゆづる／佐藤玲子／三五康子／周田裕芳／白髭市十郎／尻無浜紀美子／菅廣敬・芳子／杉山昭男・紘子／鈴木やす／鈴木連三／須永敏子／聖望学園／関口佳子／芹澤章／高澤由紀子／高田純次／高橋進・いづみ／高橋トヨ子／高橋要子／竹下公生・香代子／竹田孝一・久美子／谷川陽子／玉名教会(担当：中島)／堤重敏・和子／戸田修司／鳥居和代／中村雍子／仲吉智子／名古屋めぐみ教会(担当：藤原薰)／西一郎／西千恵／西村晴道／野田マサ子／芳賀直哉・美江／萩原耕介／橋口保夫・栄子／橋本勢津子／早瀬康平／原宏／パーソン・デビッド＆奈穂子／ハルボーセン美智代／東教区城北地区聖金曜日合同礼拝席上獻金／日野原真記／平林洋子／福田陽子／藤橋日出子／渕田康穂／本郷教会泉の会(担当：村尾多美子)／松嶋俊介／松田美智子／松本通孝／丸山正昭／南節子／南谷なほみ／宮澤真理子／宮田満須子／名東教会／森保宏／森田雅子／矢野耐子／山県順子／山崎恵美子／吉田佳代／他に匿名2名

(2004年2月1日～2004年5月31日、敬称略)



アジア学院入学式でKamble氏（左）を激励するグリテベックJELA事務局長（右）

編集後記

「奇蹟というもの一番信じ難い点は、それが現に起こるということだ」と、G・K・チェスタトンは『ブラウン神父の童心』で主人公に語らせます。この世で一番素晴らしい奇蹟は何でしょうか。それは、福音を心から受け入れるとき、自分中心の存在から、人々への愛の奉仕を志す者へ造りかえられることです。この一新された心で外の世界をながめ、主のみ旨に忠実に従い行動するとき何が起こるか、神様は故ジョン・ボーマン師やベルニダ夫人の働きを通してそれを私たちに見せてくださいました。感謝いたします。（M）